

# 病気とたたかう子どもたち200人に クリスマスプレゼントをお届けします。

みんながワクワクする年に一度のクリスマスは、世界中の子どもたちが心を踊らせる特別な日。ところがその楽しいはずのクリスマスを、自宅でご家族と過ごせない子どもたちがたくさんいます。ささやかかもしれないけど、「心のこもったクリスマスプレゼントを届けたい!」。そんな思いを胸に、みんなが冬の外苑を駆け抜けたらと考えたのがきっかけでした。



東京グレートサンタランは、企画段階から子どもたちが中心となって動いています。その子どもたちが特にこだわったこと、それは一方通行の自己満足的なボランティアイベントではなく、病気とたたかっている子どもたちと「一緒に楽しみたい!!」「プレゼントを渡すだけでなく、ずっとつながりを持ちたい!」というものでした。



12月23日のサンタラン終了後、実行委員会の子どもたちは参加者を代表して神宮外苑から慶応義塾大学病院までをパレードし、病院で待っている子どもたちのもとへ、みんなの思いが詰まったクリスマスプレゼントを届けに行きます。

2日後の25日クリスマス当日には、東京医科歯科大学病院小児科病棟と順天堂大学医学部小児科病棟をそれぞれ訪問。この日は実行委員会の子どもたちに加えてホンモノ(!?)のサンタクロースまで登場し、入院中の子どもたちと一緒にクリスマスパーティーを楽しもうとさまざまなプログラムを準備中です。

どんなことをしたら、喜んでもらえるかな？  
どうやったら僕たち私たちも一緒に楽しめるかな？

入院している子供たちがプレゼントを開いた瞬間の笑顔を中心に思い浮かべながら、実行委員の子どもたちの思いは日に日に高まっています。



## 子ども会議から・・・

「東京グレートサンタラン」は、中学生、高校生、大学生30人が実行委員として企画に全面参加しています。

「チャリティーは大人が考えるもの」という固定概念から離れ、どうしたら

みんなで楽しみながらチャリティーができるか？ それを考えながら準備を進めています。



サンタランで集まったみんなの思いを、病気とたたかう子どもたちへどう届けるか？

みんなが出した結論は、

**助ける側と助けられる側に分かれたくない。  
一緒に楽しんで、楽しさを分かち合いたい！**



というものでした。同じ子どもであっても、背景や環境はみんなバラバラ。だからこそ同世代の分かり合おうとする気持ちや助け合う気持ちを大切に、対等につながる絆を感じる日にしたいと考えたのです。



「病気で入院している子どもは、日々どんな気持ちで過ごしているのか？」

「自分たちは健康で、当たり前に行える大切なことを見過ぎてはいないか？」

「どうしたら、みんなが同じ気持ちになって楽しめるのか？」

想像するじゃ本当のことなんかわかりっこない。子どもたちはそんな気持ちから、実際に小児病棟を訪れ、先生や看護師さんに入院している子どもたちやご家族の現実を聞き、またベッドで遊んでいる子どもたちとも限られた時間でしたが寄り添うことができました。そこで彼らを感じたことは、私たち大人の想像を超えていました。そんななか、一枚の絵が子どもたちの心を大きく揺さぶります。



限られた遊びの時間のなか、実際には病室を抜けてクリスマスを楽しむことが難しいと思われる子が、自分なりにクリスマスイメージして描いた一枚の絵。それを見た一人が言いました。

## 「この絵を缶バッチにして、みんなで胸につけて走ろうよ！」

それは、入院している子どもたちの思いと一緒に走りたい！という気持ちの表れであり、もちろん反対する子はひとりもいませんでした、

クリスマスに病院に届けるプレゼント。  
モノではなく気持ちでつながるプレゼント。

いま、子どもたちはその瞬間を迎えることに心を躍らせています。



2018年9月1日

グレートサンタラン・オーガニゼーション  
(一般社団法人OSAKAあかるクラブ内)